Ⅳ　附 属 施 設

ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）

賀茂川に沿って加茂街道を上ると上賀茂神社へ渡る御薗橋に出くわす。その橋から西へ２丁ほど行った住宅街に一見して研究施設とわかる羽田記念館がある。本学工学部の故増田友也教授の設計されたユニークな２階建てである。この建物は本学第 12 代総長故羽田亨博士の内陸アジア研究における偉業を顕彰し、さらに後進に研究の場を提供することを目的として、三島海雲記念財団や武田薬品株式会社などの寄付を得て 1966 年に建てられた。以降、我が国における内陸アジア研究の中心施設のひとつとして、国際会議、講演会、研究会、あるいは個人研究に使用されてきた。また学術書の出版活動などもおこなってきた。とりわけ田村実造・今西春秋・佐藤長編『五体清文鑑譯解』（上下 1966 ～ 1968 年）や羽田明・萩原淳平他編『明代西域史料明実録抄』（1974 年）はよく知られている。羽田記念館には、内陸アジアあるいは西アジア地域に関連する漢籍や、チュルク語、蒙古語、ペルシャ語、アラビア語、インド語などで書かれた書籍、さらに欧米の研究書、雑誌など合わせて約１万点の蔵書がある。若干ではあるが東南アジアやシベリア関係の書籍も保管されている。

羽田記念館は建設以来「内陸アジア研究所」として親しまれてきたが、その後学問体系の変容あるいは研究方法の発展にともなって、研究対象地域は内陸アジアから徐々にユーラシア地域に拡大され、2004 年４月には現在の名称に改めて正式に文学研究科の附属研究所になった。

本センターの概要は以下のとおりである。

Ⅰ 組織

本センターは、約 10 名からなる運営委員会によって運営され、文学研究科教員兼任研究員と外部研究員の合計約 40 名の研究員が置かれている。

Ⅱ 研究分野と研究内容

本センターには歴史、言語、宗教の3 つの主要研究分野がある。研究の方法は「内陸アジア研究所」時代以来の文献学的手法を重視しながら、一方で現地調査にもとづいた研究方法も取り入れている。

1. 歴史研究

内陸アジア史研究において培われた実証主義的歴史学の伝統を継承しながらイスラム文明の中心地である中央ユーラシア地域、あるいはさらに広い地域の歴史を、イラン系言語、セム系言語、アルタイ系言語、漢語などで書かれた史料を駆使して、各地域の個別的研究を有機的に連関させ、広大な地域を流れる人間の歴史を動態的に研究する。

2. 言語研究

イラン語、インド語、トカラ語、ウイグル語、西夏語、モンゴル語、チベット語などで書かれた中央アジア地域出土文献、さらにヒッタイト語、シュメール語など西アジア出土文献の言語について研究する。また、イスラム圏とシベリア地域に点在する「消滅の危機に瀕した言語」の調査記録の蒐集とその分析研究も併せておこなう。

3. 宗教研究

ユーラシア地域には、イスラム教、仏教、キリスト教、道教など今日に伝わる大宗教のほかマニ教のように消滅した小宗教も多数ある。これら大小の宗教がこの地域の人々の生活・思想にどのように作用してきたかについて、古語文献にもとづいた研究をおこなう。

Ⅲ 研究活動の公開

年に２度開催される「羽田記念館講演」は「内陸アジア研究所」時代から通算して 55 回に達する。講演はセンター員のほか、国内外の研究者を招いておこなわれ、すでに国際的にもその存在が知られている。このほか、各種講演会が不定期におこなわれる。また、定例の研究会が数件開催されている。

Ⅳ 教育

ユーラシア古語文献研究の拠点として若手研究者養成の目的で、夏期休暇中に古文献言語の講習会がおこなわれる。

（庄垣内正弘記）

文学研究科図書館

1. はじめに

文学研究科図書館は、ここ数年利用環境の改善をはかってきている。2003（平成 15）年 6 月に図書室利用規程の改定、同年 12 月には貴重書基準の制定、2004（平成 16）年 4 月に貸出・返却手続きの機械化、同年 6 月に現物貸借等 ILL の実施、同年 7 月には図書館ホームページの立ち上げ、2005（平成 17）年 4 月からは全蔵書の全国学術情報所蔵データベースへの入力、すなわち遡及入力の実施、貸出・返却手続き機械化のための資料 ID の付与等である。そしてこの間の 2004（平成 16）年には国立大学の独立行政法人への移行に伴い、それまでの名称であった文学部図書室を「京都大学大学院文学研究科・文学部図書館」と改め登録している。

2. 創設期から哲・史・文 3 学科閲覧室体制へ

ところで、文学部図書室については『京都大学文学部 50 年史』（1956 年）に触れられているのでそれを参考に、その後の変遷を含めて次に振り返っておきたい。

1906（明治 39）年 9 月に文科大学は開設されるが、それに先だち附属図書館長島文治郎により、将来の文科大学に必要と思われる図書の収集がなされている。図書は開設と同時に研究室に備え付けられ、学生には自由な出入りを保障し研究の便宜を与えていた。附属図書館には図書を集中させず、各学部図書室あるいは研究室にこれを配置したが、この分散配置という方針・方向はここにはじめて確立したのである。最初期の文科大学の図書の状況は、施設の制約もあって各講座の実情にあわせそれぞれが資料を収集、配置していたが、それらは各研究の新しい方向を見据えたものとしても収集されていた。

1914（大正 3）年 3 月に史学科陳列館が竣工し、史学科の各研究室および美学美術史研究室などがこちらに移り、その建物の西側には書庫が設けられ、ここに各研究室の図書が集中配架されることになった。別に閲覧室も設けられたが、それまでの午後 4 時閉室を夜 9 時まで延長開室している。

1923（大正 12 年）12 月には本館西側の一部が竣工したが、その南隅に書庫四階と閲覧室が新設され、哲学科および文学科の図書全部を移し、2 階に哲学科閲覧室、1 階に文学科閲覧室を置いている。従来の研究室規則は改められ、新たに図書室規則と図書室細則が制定された。1924（大正 14）年には本館西北隅に書庫が新営され、文学科の図書および閲覧室がここに移り、1936（昭和 11）年 10 月には本館南側の増築が完成したことによって整理事務室はこちらに移っている。

1935（昭和 10）年に起工した東館は、1936（昭和 11）年 9 月に一部が竣工するが、全容が完成したのは 1965（昭和 40）3 月のことであった。この東館の完成により、史学科の図書および閲覧室が陳列室から移転、こちらに置かれることになった。その後 1997 年の文学部新館の竣工まで、記憶に新しい哲・史・文 3 学科閲覧室体制が続くことになる。

また、この時期には特殊コレクションと称する個人文庫のほとんどが寄贈や購入の形で収集されている。これら個人文庫については『文学研究科図書館利用案内』等で紹介しているが、1914（大正 3）年の内田銀蔵文庫 3,650 冊、1932（昭和 7）年の桑原隲蔵文庫 12,457 冊をはじめ、田中秀央文庫、西田幾多郎文庫、田辺元文庫、頴原退蔵文庫等々、30 を越えるコレクション群としてあり、書庫の一角を占めている。

3. 閲覧室統合と 3 学科閲覧室の終焉

1991（平成 3）年 3 月、書庫の狭隘化と老朽化により、とりわけ耐震上の問題もあいまって、10 万冊の疎開計画がたてられ、図書の梱包と移転が行われている。当時の図書室面積は 2,500 m^2 で、「国立学校建物基準面積算出表」から算出

される文学部の図書室面積 6,400m² の半分以下の状態にあり、収容能力はすでに限界を超えていた。したがって増改築や建て替えの要望が相当に高まっていたといえる。また図書の梱包等については 1992（平成 4）年 2 月の『AERA』誌に掲載されたこともあり、一時的には大きな反響を呼んだ。

1995（平成 7）年 1 月、本部構内の長期改築構想に基づく文系四学部共同棟の完成にあわせ、文学科の図書および閲覧室が共同棟に移転し、2 月には閲覧業務を開始している。また 1996（平成 8）年 8 月には文学研究科・文学部新館の一部完成にあわせて哲学科の図書および閲覧室が移転し、先に移転した文学科閲覧室と統合した形で 9 月から閲覧業務を開始した。さらに 1997（平成 9）年 9 月、新館の完成とともに史学科の図書及び閲覧室が移転し、哲・史・文 3 学科の閲覧室および書庫が一体化され業務が開始された。ここに永年の懸案であった図書室統合が実現したのである。しかしながら、この一体化の際にも、それまで用いられてきた図書分類はその所蔵数の多さから統一されることはなく、唯一雑誌についてのみ一本化されたが、今日なお 29 種類の分類体系を有し専修毎に A 書庫から G 書庫まで分散配架し、管理・運用されている状況である。なお、資料は寄贈、購入の如何を問わず書庫に集中配架され、文学研究科構成員は自由に書庫に入り図書を手にとることができるが、繰り返すまでもなく、これらは創設期以来の一貫した運営方針であった。

4. 今後の課題

文学研究科は創設以来、史・資料の収集、管理、運用に多大の努力を重ね、その結果図書館には現在約 93 万冊（2006 年 1 月 31 日現在、和書 554,678 冊、洋書 374,932 冊の総計 929,610 冊）の蔵書を有し、また年間 15,000 冊前後の購入をはかっている。この蔵書数は本学においてはもちろん全国的にも屈指のものであり、また内容的にも多くの研究者から高い評価を受けている。それだけに、今後とも資料の収集、保管は積極的に進められなければならない。先述のように図書館は一方では改善の努力をしているが、こと書庫の狭隘化という点では依然として未解決状態にあるといえる、というより極めて深刻な事態になってきているというのが正直なところである。創立 100 周年を迎えた文学研究科には、新たな今後にむけての課題として、大学における教育・研究の核としての図書資料、大学図書館のありかたについて強力なイニシアティブを発揮し、展望を切り開いていくということが求められている。

（松田博記）